

## 檜枝岐歌舞伎

千葉之家花駒座百周年 特別歌舞伎公演ダイジェスト

「絵本太功記」十段目「尼ヶ崎の段」



福島県の重要無形民俗文化財「檜枝岐歌舞伎」を支えてきた「千葉之家花駒座」が、2022年、創立百周年を迎え、6月24日に特別公演が行われた。檜枝岐村の人たちが役者となり、裏方となり、世代を超えて受け継いできた村の宝「檜枝岐歌舞伎」。

この日の演目は、「絵本太功記」十三段のうち、最も知られている十段目「尼ヶ崎の段」だ。

物語を手短に紹介すると、「本能寺の変」で信長を討った光秀が、尼ヶ崎の家に戻ったのだが、旅の僧のふりをして家にいた間者、久吉（秀吉にあたる）と誤って、母の皐月（さつき）を竹槍で刺してしまう。息子の十次郎も戦で傷を負って家に戻るが、家族の見守る中、息絶える。

歌舞伎をゆっくり味わってられないほど、懸命に撮った写真とともに、物語のダイジェストをお届けする。



光秀の子、十次郎（右）と許嫁の初菊

仮祝言を済ませたばかりの二人だが、討ち死に覚悟の十次郎は、他家に嫁げと初菊に別れを告げる。それでも止めようとする初菊とのやりとりは見どころのひとつだ。



旅の僧（実は秀吉ならぬ久吉）が湯殿の案内をする。



「本能寺の変」の後、生きのびて尼ヶ崎に戻った光秀は、家に間者（久吉の名だが、秀吉のこと）がいることに感付いており、それを討つために竹槍を作る。



光秀が竹槍で刺したのは、あろうことか母の皐月であった。



刺し傷の痛みを耐えながら光秀の非行を責める皐月。そこに戦で傷を負った十次郎が戻り、瀕死の状態での戦の様子を報告する。



死にゆく母（皐月）と一人息子（十次郎）



大泣きする光秀。



旅の僧が久吉（秀吉）として姿を現し、二人は、後日、天王山での決着を約束して幕引き。



舞殿（歌舞伎舞台）に向かって右手の太夫座にいて、客席から姿は見えないが、感情みなぎる浄瑠璃語りと三味線で役者を盛り上げた太夫（右から四番目）の熱演も見事だった。

6月の特別公演は、開演が普段より1時間早い午後5時。役者さんたちは、まだ明るい中、観客の顔も見えない状態で演じなければならず、緊張の度合いも違ったことだろう。だが、場数を踏むことで、役者たちの力量も上がる。檜枝岐歌舞伎は、多くの人たちに是非、生で観てほしい郷土芸能だ。